

四
三

私は生命と云ふものが如何なるものなるかを明した。
 生命とは何処までも多と一との矛盾的自己同一的世界が
 自己矛盾的に自己自身を~~有限の~~^{有限}過程に過ぎない。歴史
 的世界が~~自ら~~^{自ら}作るためのかゝる作るものへと自己自身を
 形成し行く過程であるのである。故に生命は一である。動物
 かゝる人間へ進化したと云つても人間は動物でなくなつた
 のではない。動物の生命と云つても既に自己矛盾的である。
 故に私は人間は動物的生命の極人間は動物生命の極と
 して有ち、動物は人間を伴極として有つと云ふ

三三三

日本文化

所以である。人間も動物も創造物である。衆生である。但人間
 の生命は作られたものか作られたものといふ歴史^的生命の極
 致に立つものである。神は其像の如く人を創造したまへり
 と云ふ如く、矛盾的自己同一の頂点に立つのである。その
 人間は^{絶対矛盾的自己同一}神に對して立つと云ひ得るのである。
 人間は^{人間は}神に對して立つと云ひ得るのである。
 その成立の根柢に於て宗教的と^{云ふ所以}考へ得るのである。
 動物的生命と云へども、矛盾的自己同一的世界の自己形
 成として、作られたものか作られたものである。即ちそれは
 創造^一行くことである。空間的、時間的、世界の自己形
 成^一行くことである。併し動物的生命と云ふのは、未だ~~成~~

物質性

の空間面

物質性 世界を離れない、環境的である。多のーであつて、一の多
 とではなない。物質的と考へる水の所以である。作る水たもの
 から作るものへと云つても、尚ほ眞に作るものと云ふものは
 は現れない、寧ろ作る水たものから作る水たものへである。
 それは^尚矛盾的自己同一的の個物相互限定の世界ではなない。
 絶対矛盾的自己同一の世界は、過去は既に過ぎ去つたもの
 でありながら、未だ過ぎ去らぬものであり、未来は未だ来ら
 ざうものであり、既に現れて居るものであり、現在
 が過去未来を含む世界、~~時~~時が何処までも對立するもの
 の統一として、何処までも空間的なる世界、~~逆~~逆空間性^がの

日本文化

場と一いつの間、何処までも時間的な世界でなければなら
 ない。断絶の連続の世界でなければならぬ。行為的直観的
 物主見、見ることから働く世界でなければならぬ。利
 己的の物主見の世界即ち歴史的世界に於ては、古代民
 族の作つたものも、我々も現在である。例へば、ギリシヤ
 の藝術や哲学も今日の我々も動かすものである。今日の
 我々も於て尚生きたものである。タルドの云ふ様、リュクル
 ゴスの立法も、パリの議會議、模倣放射となるであら
 う。そして、單なる空間的連続として因果的因果關係
 とか、又單なる時間的連続として合目的因果關係とか云

日本文化

小ものも越えたものがあるのである。それは幾多矛盾的自
 己同一性的な歴史的空間に於ての出来事であらねばなら
 ない。そして個物が何処までも個物と在りて一つの世界とな
 る。然るに、^{自己}矛盾の自己同一世界の一角となる。其
 一と云ふ個物相互限定の世界があるのである。他から考へるに
 考へるに、^{人びと}独自の歴史的実在性否すべからず
 実在性がそこから考へらるゝと、^{客観的}実在性と云ふもの
 のは、そこにあるのである。かゝる歴史的世界の自己矛盾的
 発展として、人間の生命と云ふものが出て来るのである。
 矛盾的自己同一性上、主体が即環境環境が即主体と云ふべ

|||||

日本文化

き自己自身を形成する人間の生命と云ふものが出て来る
 のである。或人間の生命と云ふも、歴史的生命の自覚の外を
 うない。人間の生命を斯く考へるならば、それは動物のそれ
 とは歴史的生命の両極と立つと云ふことが出来る。併し
 それを^単身体を越えるとか否定するとか云ふことではない。
 我却つて矛盾的自己同一的な身体^的形成を何処までも進
 めて、その極限と達到了とである。我々は矛盾的自己同一
 的なポイエシスの自己即ち身体的自己の一方に於て之を
 越えて^{単なる物質界}物理的^的生命と云ふものを考へるものが、逆して他
 の一方に單なる意識界と云ふものを考へることが出来る

日本文化

であらう。併しそれはいつも此のポイエシス的自己の自覚
 の立場から考へられるのである。それからそれへである。又
 歴史的實在の世界は実践の世界と考へられる。併し実践と
 云ふことは^{意識的}然考へることではなくして身まいて行ふ
 ことであらねばならない。身体を通さぬ実践と云ふもの
 はない。プラクシスの世界へはポイエシスが通路とならな
 ければならない。^{逆と絶対}矛盾的自己同一の^的極限はプラクシス
 の世界~~は~~はポイエシスの世界であらねばならない。
 個物的多と全体的一との矛盾的自己同一として、~~世界が~~
 空間的なると共に何処までも時間的なる世界に於ては、個

世界が

月本文化

全体的として自己自身を形成する自己

形成の仕方であると共に、個物の行動のパラダイグであ
 った。否、個物は^{此世界に於て}それによつて生れ働き死に行くのである。人間
 は絶対矛盾的自己同一の世界の個物的多である。何処^{人間}まで
 も個物的である。独立的である。自由^{意志的}である。それは我々人間
 と云ふものがあるのである。併し人間と云ふのも、矛盾的自
 己同一的世界の個物として、種^種的^種に生れ働き死^死に行くので
 ある。そのかぎり、人間も生物的である。併し又そのかぎり人
 間が人間でない。人間は~~生物~~^種的^種に生れ^種るが、世界の個物とし
 て種を否定する所^{何処までか}人間と云ふものがあるのである。故に人間

×無論種と種を否定すると云ふのではない。

X 單子生物的種的ニ生れるのてなく。

は何処までも個物的多と全体的一との矛盾的自己同一的
世即ち絶対矛盾的自己同一的として作られたものか
ものへと^{いふ}絶対矛盾的自己同一の^の自己自身を形成する世界の自己形成によつ
て、生水働き死^や行くのである。我々人間の個体と云ふのは
か、この世界の自己形成の形を宿して居るのである、我々は
か、この形によつて生き^るのである。故に我々は^X歴史的
種的小生水ののである。歴史的種とは^の社會^{のこと}である。社會と云ふのは
である。社會と云ふのは^{矛盾的自己同一的}歴史的^の世界が全体的一として自
己自身を形成する自己形成の形である。社會と云ふのはか
、この矛盾的自己同一的な形として、我々が歴史的に生れる

日本文化

と云ふことは社會的^に生れ^る事^であり、我々の行動は
 何処までも歴史的社會的であると共に、個物が何処までも
 世界の個物として独立的である^{所_レ即チ}、個物が生きる所^レ社會^の
 生^{命_レが}あり^てである。人間が單^に在^る曲^曲單^に独立的^なとして
 非社會的となつた^事は、抽象的となつたことと過ぎない
 が、全体的に個物を否定し行くと云ふことは生物的生命
 の方向に退化し行くことと過ぎない。

絶対矛盾的自己同一の世界は前^に云つた如く表現的^に
 自己自身を形成する世界でなければならぬ。その處に單
 なる一を考へることもできぬ、單なる多を考へることも

四三三三

日本文化

へと機械的と云ふことでもない。何処までも個物的多と全
 体的一との矛盾的自己同一と云ふことである。時空は
 時が即空間、空間が即時であるのである。故にそこでは見
 ことが働くことであり、働くことが見ることである。見
 云ふことは、我々が自己を否定して世界の中に入ること
 である。物となることである。作るものと云ふことは我々
 が全体的一を否定して個物的多として働くことである。個
 物は真世界自己自身の以て世界を映すこととして上つて欲求
 的であり、絶対矛盾的自己同一的世界の個物として思惟的
 であり、構成的である。而して真に個物的なものはある程、自

113

日本史

己矛盾的に世界の構成要素として働く物となつて^{考へ}物となつて働くのである。故に作られたものから作るものへと
 いふ所、^{世界}世界は意識的であり、矛盾的自己同一的自己
 形成的として理性的である。^{「思维的根柢」としての}普遍者^{一般者}と云ふのは、矛盾
 的自己同一的世界の^{「表現的自己」}形成の形即ち仕方^{「普遍的」}過ぎない。理
 性と云ふのは、^{個人}個人の頭の中にあるのではなく、^{「普遍的」}何処までも客
 觀的でなければならぬ。理性は世界^{「普遍的」}の構成力で
 なければならぬ。理性は何処までも歴史的理性でなければ
 ならない。我々の生命が何処までも^{「普遍的」}畢して作られたものか
 ら作られたものへでなく、作られたものから作るものへと

個人頭の中にあるのではなく、何処までも客觀的でなければならぬ。理性は何処までも歴史的理性でなければならぬ。我々の生命が何処までも畢して作られたものから作られたものへでなく、作られたものから作るものへと

何処までも客觀的でなければならぬ。理性は何処までも歴史的理性でなければならぬ。我々の生命が何処までも畢して作られたものから作られたものへでなく、作られたものから作るものへと

日本文化

して絶対矛盾的自己同一的世界の個物的なつが故に理
 性的であるのである。我々は當為的であるのである。
 故に我々はかゝる世界の個物として歴史的身体的であり、
 我々の社會は^{世界の社會は}社會性歴史的世界の自己形成として^{漸即的}歴史の種として、
 我々の社會は^{世界の}客觀的表現を以て始まる。即ちミトス的な
 ものを通じて始まるのである。そしてそれは作られたものか
 らとして^は全体的一であるが、多と一との矛盾的自己同
 一として、個物的多の方向に進むに従つて理性的となる。種
 種としての社會が自己自身を形成する世界となる。上と云
 った如く人間も動物である。併し人間の社會は動物的生活

我々は

日本文化

か、つ意味に於て非連続の連続たるかぎり、それは生産的
 であり、生命が連続的^たと考へる水も生産的であるかぎり、~~非~~
~~連続的~~生命が連続する。動物の世界にか、つ意
 味に於て、動物の世界も生命の世界と考へる水なのである。
 併し動物の世界に於ては、作らぬたものが身体を離れな
 个体が个体自身を作つて行くのである。栄養と云ふことは
 云ふまでもなく、生殖と云ふことも、~~個~~个体が个体を作つて行
 く^{以上}と云ふこと^{以上}出ない。个体に宿す世界の形と云ふのは、尚
 眞に矛盾的自己同一的な形ではない、自己自身を限定する
~~形~~ではない。外が外外が外として、个体が自己自身を否定し

日本文化

×要するに動物はまた世界と云ふものはないのである。

日本文化

て世界となると云ふことはない。個物と個物^(が)自己自身を
 否定して世界に於て物を見つと云ふことはない。未だ
 於て表^出現する~~世界~~と云ふ知覚と云ふものはない
 然るに人間の生命に於ては作られたものが作るもの
 を離れて公のものとなるのである。作られたもの、生産物
 が、^作個体を離れて世界に於ての物となるのである。而
 して逆^に作るものを作るものである。何千年の昔
^{我が}遠く隔った地中海の半島に於て、ギリシヤ民族が生産した
 文化が今日でも我々を動かす、我々を作るのである。我々^の
 作ったものでありながら、作られたものは我々を離れて何

ことが逆^にと云ふ自己自身となつてあること

未だ

✕

日本文化

客観的

処までも我々^{客観的}と對立するものであり、即ち見られるもので
 あり、逆して我々の主動かすものである。而してかゝる矛盾
 的自己同一の世界に於ては、我々が作ると云ふこと、その事
 がかゝる世界の自己限定として起るのでなければならな
 い。私の行為的直観的^{客観的}に物を見つと云ふのはかゝる世界の
 個^{客観的}として物を見つと云ふことと外ならぬ。客観的^{客観的}
 として世界宿す世界の形と云ふのは、何処まで矛盾的自己
 同一的でないかばならない。即ちそれは自己自身を限定す
 る形として、イデア的^{客観的}に物を見つと云ふのはならない。プラトンの
 イデアと云ふのも、元來^{客観的}に多と一との矛盾的自己同一的

客観的

日本文介

な形と考ふべきものでなければならぬ。プラトンも晩年
 の論理的な會話篇に於て^は斯く考へようとして居るので
 はないかと思ふ。ヘーゲルに至つては、イデアは矛盾的自己
 同一的な辯證法的動的イデアとなつた。故に何処までも矛
 盾的自己同一的な人間の生命に於ては、~~我々の~~個体的其
 行為は何~~持~~か~~も~~意味を於て~~も~~辯證イデア的なものを見る。
 永遠なるものゝ觸れると云ふことがあるのである。歴史的
 種として我々の社會と^{云ふのは、}矛盾的自己同一な世界
 の種^{種々な}自己形成の種々仕^{へと云ふべきもの}方^{矛盾的自己同一な}あり、何処までも世界
 として自己自身を形成するものでなければならぬ。動物

日本文化

の本能的群生活とは異なつて、人間の社會とは最初から個人と云ふものがあり、云はゞ制度的である。トイテムとかタブーとか云ふものは、^{のほ、更}社會的本能的の動向^{への對する}抑制の抑制の意義を有するものであつて、個物的多と全体的一との矛盾的自己同一として、作る水たものから作るものへといふ時、社會は世界の自己形成としてイデオロジックである。社會がイデオロジックを宿すが、それは道徳的の主体として國家の名を^値積するものである。

歴史的世界の自己形成に於ては、主体が環境を限定し環境が主体を限定する。人間が環境を作り環境が人間を作る。

三三三

日本文化

人間の歴史は或民族が或土地に住むことから始まる。民族
 と云ふのは必ずしも生物学的同一の血を去と云ふことるなくともよい。
 或民族が或土地に住むと云ふことは、その土地に技術と云ふもの
 がなければならぬ。技術何事ゆかの意義に於ては技術と
 云ふものなくして人間が或土地に住むと云ふことはでき
 ない。技術とは人間と自然と即ち主體と環境とを結合する
 ものである。動物も或環境に住むは技術的なものがな
 ければならぬ。併し動物のそれは本能的であり身体の延
 長に過ぎない。動物は道具主有たない。眞の意味に於て道具
 と云ふものは、物の形でなければならぬ。甲の物である

日本文化

日本文化

123

かこのものともなれり得るものでなければならぬ。既に作
 られたものから作るものへと云ふべき性質を有つたもの
 になければならぬ。技術と云ふのは固一個人のものでは
 なくして社会的なものである。所謂私的所謂矛盾的自己同
 一的な社會の自己形成から生れかゝるものとして発達し
 行くのである。或藝術家の技術（例へば、
 彫刻、
 建築）如何（その
 人、
 其の
 独特）
 ものであり唯一的なものであつても、その社會の歴史的発
 展として其の歴史的地盤から生れかゝるものにならな
 ばならぬ。民族と環境（環境）とが技術的に結合して、作る水
 たものから作るものへと一つの自己自身を形成する社會

日本生作

が成立した時、歴史的種として一つの歴史的^主実体が成立す
 るのである。私は今環境から社会歴史^主的実体としての社会
 を考へた。併し社会は唯環境から考へるものではない。
 環境は主体的なるかぎり、環境であるのである。單に環境と
 云ふものがあるのではない。主体と環境との矛盾的自己同
 一として、主体と環境と云ふものがあるのである。作られた
 ものから作るものへと、自己生産作用として、社会は自己^主
^{自身を維持}維持するものである。社会の個性と云ふものは、^{潜在的}潜在的なもので
 が、現れるのでなくして、^断断ち切られて作られた行くものでなく
 ればならない。而して社会が、^{形成作用が絶対矛盾的}形成作用が絶対矛盾的

日本文化

の世界の自己限定
 自己同一として、その世界が世界自身を限定する。形が形
 自身を形成するに過ぎり、イデオロギカルな文化作用であるの
 である。作られたものから作るものへと自己自身を形成し
 行く社会の自己生産作用が、自己自身を形成する能動的な
 形の作用として、その新しい形が~~生れる~~、新しい人間
 が~~生れる~~に過ぎり、その文化作用であるのである。作られた
 ものから作るものへと云ふことは、その絶対矛盾的自己同
 一の世界の自己限定として、~~創造的~~と云ふことでなければならぬ。新
 しい人間
 の形即ち種が~~生れる~~と云ふことでなければならぬ。主
 体が環境を環境が主体を形成すと云ふことは、絶対矛盾的

X 生れる、新しい種が生れる。

~~技術的進歩の歴史は、人類の歴史そのものである。技術は、人類の生活の基盤を形成し、社会の発展を促す。技術の進歩は、人類の文明の進歩と一致する。技術は、人類の未来を決定する。技術は、人類の運命を決定する。技術は、人類の希望を決定する。技術は、人類の理想を決定する。技術は、人類の未来を決定する。技術は、人類の運命を決定する。技術は、人類の希望を決定する。技術は、人類の理想を決定する。~~

~~技術は、人類の歴史そのものである。技術は、人類の生活の基盤を形成し、社会の発展を促す。技術の進歩は、人類の文明の進歩と一致する。技術は、人類の未来を決定する。技術は、人類の運命を決定する。技術は、人類の希望を決定する。技術は、人類の理想を決定する。~~

自己同一として新世界が成立する。新しい人間が生まれると云ふことではなけり。政治と文化との区別及関係も、^{向問題}此の如き^{立場から考へてみる}者^の思ふ^{時間的空間的}な歴史的世界から於て、社会が^主体的歴史的主体として、主体的に自己自身を維持するは、技術的になければならぬ。一般的に技術は社会的と云つたが、社会が全体的として自己自身を維持する技術が政治と云ふものであり、~~政治は力な~~マキアヴェリの政治の考は、一面を極端に進めたものである。自然と對する人間の技術と云ふものは、如何なるものでも政治を通じて^{社会的身}。

X (之を互に^{個物的多と}環境的^{個人}的技術と云ふものが成立する)。

我々の社会的身体的となるのである。例へば科学の発達の結果如何なる機械が發明せられたとしても、それが我々の社会生活と結合する事は、政治を通じてなければならぬ。技術とは主体が環境を主体化する事、主体と環境とが一つとなる事である。政治が技術並だと云ふのは、唯單に民族が^{自然}環境と^{矛盾}的自己同一的の事となることではな~~い~~。歴史的主体の環境となるものは、^{さき}周囲の~~民族~~民族^{との関係}も、~~すべて~~政治地理的なものが入つてなければならぬ。否、すべて歴史的に作り出されたものとして与へられたものが入つてなければならぬ。加之、~~環境が主体を規定する~~生命は自由

日本文化

×生命をなければならぬ。

生物的

×(ホルダーンが外にも環境があると云ふ如く)。

が環境の中にある

歴史的主体としての社会は自己自身の中へ環境を有つた
 であるが、~~その~~環境と主体との結合として、私は政治を技術と
 云ふのである。経済機構と云ふものが、~~我々~~人間^の社会生活
 の~~必然~~根本的な技術的組織として社会形態を決定すると云ひ
 得るのである。併しそれは何処までも主体的として
 政治的をなす水はなすない。而してそれは歴史の種々
 なる~~歴史物~~歴史物^のなるもの、~~時間的~~時間的なるものが基となすなけ
 ればなすない。主体は單に環境から作られたものではなす。單
 に経済が政治を決定するのではなく、政治が経済を決定す
 る~~ゆが~~ゆが^はと云ふべきである。政治と云ふものは^は色々の考

日本文化

日本文化

がある
政治とは本質的では右の如く

歴史的種としての全体的一の技術と云いべきものである

う。政治は~~唯~~道德ではない。併しそれは唯社會の自己生産作

用と云ふのではなく、歴史的種として人間形成の目的を有

する~~ものとして~~政治は何処までも道德的をなけりはならない。

然るがそれはそれは~~権~~黨派的な權謀術教たるに過ぎない。

單なる道德的標語は政治ではなく、單なる~~力~~黨略は私力や策

略~~は党争~~は私利私慾を以て過ぎないの外、何物でも存在

もない。

文化と云ふものは、非實在的と考へる或は單に~~於~~戯

人は一も二もなく

人がある。

日本文学

的とす考へるものもあろう。文化とは歴史的世界の自己
 形成として、それ人間が成立するところである。新
 しい人間が形成せられることである。新たな人間の種が生れ
 ることである。社会は矛盾的自己同一として種が生
 き、このことによつて個が生き、個が生き、このことによつて種が
 生き、作られたものから作るものへと自己自身を維持
 して行く。絶対矛盾的自己同一的世界の種として、自己自身を
 形成する種的形成、即ち人間形成が文化と云ふものがある。
~~存在は存在し、而して~~人間形成と云ふことは歴史的
~~歴史の~~形成と云ふことであり、歴史の創造と云ふことで

併し作用

文化発展とは

×それは歴史的身体の形ではない。

日本文化

なければならない。生物的^{生命}の世に於て世界の自己形成とい
て種生物的種と考へる水たものは、^{人間}の^{生命}では文化形
態と云ふものでなければならぬ。文化形態と云へば、~~人~~
は唯了解の対象としか考へない。文化的産物と云ふものは、
作られたものとして、公の場所、即ち歴史的空間に置かれた
ものである。此故に、既に過去に入ったもの、自己と隔つた
の、要するに歴史的空間に於て遠くにあるものは、單なる了
解の対象とも考へる水たものであろう。文化^{文化}産物として公
の場所、歴史的空間に於てあるものは、一應皆了解の対象と考へ
る水たものである。然るに水たば、それは公のものではない。即

日本文化

表現的形態のものであり、併し文化形態とは了解の対象と過
 きないといふ^人。併しその人自身が或時代の或社会の人と一
 つの文化形態的^然に考へて居るのでなければならぬ。
 歴史的^は世界^はと云ふものは^た具体的^な實在^界と
 考へてめなない、唯生物界とか物質界とか云ふものは實在^界と
 考へて居る。故に文化と云へば、一途に非實在的と考へるの
 がある。絶対矛盾的自己同一として世界が世界自身を形成
 するとは、人間^がと云ふ^が生物^のの^{作用}であり、
 作られたものか作つものへとして、文化的^{作用}形態と云ふは
 生物^的的^な形態^はと云ふのは生物^的的^な形態^は

文化は... 表現的形態... 歴史的世界... 自己形成の過程...

社会と云ふものの止む行くことになければならない。之

は互い如何なる社会も技術的なるかぎり、何等かの意味に

於て其文化文明的になければならない。文化と云ふのは、非

技術的に成立するのではない。それは単に生物的生命を越え

るとか離れるとか云ふことではない。人間と云ふは、生物的生命を

のものが文化的となるのである。文化と云ふのは、
かゝる方向が 文化と云ふもので

ありう。

我々人間の社会は歴史的種として自己自身を否定して

自己自身が一の自由自身を世界となすといふ所、自己自身の本質を有つ

ものでなければならぬ。その成立の根源に於て、
自由自身

X その全体的一は絶対矛盾的自己同一を蔽映するものではない。此故に

日本文化

世界が世界自身を限定すると云ふことが含まれておな
 水はなすな~~い~~。X 水は^{具体的理性的}理性~~的~~でなければならぬ。外~~の~~も
 何と~~い~~、それが道徳的実体であり國家である。併し社會は
 歴史的世界の~~い~~或時代~~の~~或場所~~の~~於て成立するものとし
 て、文化形態的~~な~~なければならぬ。或特殊な文化形態を
 有つておな~~け~~ればならぬ。而して~~其の~~歴史~~的~~時代~~を~~作
 ち~~と~~云ふことが、
 何~~ん~~何~~ん~~何~~ん~~までも世界を絶対^{絶対}矛盾的自己同一~~とし~~て世
 界を世界自身を限定する^{世界の}一つの歴史~~的~~時代を映すも
 のとして~~其の~~歴史~~的~~と~~現~~實的~~的~~で~~あ~~
 働~~の~~存~~の~~が~~あ~~り、併し絶対^{絶対}矛盾的自己同一の世界は

田田田

日本文化

何処までも作られたものから作るものへである。歴史の時
 代が移り行くと共にそれは過去のものとなるでもあろう。
 而してそれは単なる了解の対象とも考へるべきであらう。
 併し我々の行為は單に生物学的でもなければ單に論理的で
 もない。歴史の種族的形成として文化形態がなければならぬ。何
 処までも作られたものから作るものへでなければならぬ。而し
 種族的形成は本質的である。種族的形成として文化形態がなければならぬ。而し
 何処までも過去未来が現在と同時に存在する歴史的世界自身
 の自己形成として過去のなものも現実的がなければならぬ。
 ない。昔は過去未来がそれ一つとなつたと云ふのみならず、

三三三三

歴史的空間に於ての

日本文化

種々なる種^(種)が、~~そ~~と云ふことができた。初^初と云つた如く何処までも時間空間の矛盾的自己同一の世界に於ては、無数なる時何処までも空間的に對立するもの統一として、非連続の連続として、無数なる時が成立する、無数の種が成立する。種と種とは直接に結合をさせない。種と種との間に何処までも闘争ありのみである。種と種とは何処までも歴史的世界の種として作るものか、作るものへと生産作用的に、否、文化^{作用}形成的^{作用}の^{作用}となつて行くのである。而してそれが歴史の種として自己自身の中^{本世界}に世用^{世界}世界を宿し、種そのものが生きる所以である。歴史的世界

は矛盾的自己同一として、何処までも種と種とが相対立し
 相争い闘争の世界である。併しそれは何処までも作られた
 ものから作つたものへと一々の自己矛盾であり、逆して世界の
 自己^{形成}限定として、^{その}一つの文化形態が最も深い意味に於て
 歴史的生産様式が決定せられたのである。歴史^の世界^は
 それの闘争は^{一つの}新^な生産様式^の展開^の過程^の中^にあり、
 は悲劇的である。それは新らしい人間が生れなければなら
 ない。それはよつてのみ、一つの時代が形成せられた歴史が
 安定を得るのである。古代は古代の人間の形態があつた。
 中世の始りは中世的人間が形成せられた。レオニ

三三三

シンス時代はレネーシンス型の人間が出て来た。東洋では東洋的人間の形態があつた。今日の~~我々の~~世界闘争からは、^又新しい人間形態が生れて来なければならぬ。

~~これは~~これは世界歴史的形体的なものである。今日の世風の揺は世界が一変するところにある。

加へて新しい形があるのである。